

## 関西英語教育学会報 2008年度 第2号

事務局: 〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4丁目698番1  
大阪教育大学 英語教育講座 本田勝久研究室内  
Tel & Fax: 072-978-3526 e-mail: honda@cc.osaka-kyoiku.ac.jp  
URL: <http://keles.hp.infoseek.co.jp/> 2008年7月1日発行

### 前会長挨拶

#### KELESの一大飛躍のために

紫陽花が周辺の緑に映える季節となりました。会員の皆様方が教育・研究・授業実践・校務・等々にお元気に精励されている日々を想っています。

第12回神戸研究大会の際の会員総会に於きまして、2期4年間の任期を終えまして、会長職を退任いたしました。

その間、会員の皆様方には、研究発表、実践報告、ワークショップ、等で発表して頂いたり、研究大会等に積極的に参加して頂いたりいたしまして、本学会の諸活動を盛り立てて下さいました。学会の主役である会員の皆様方のご尽力によりまして、本学会も隆盛の一途を辿りつつあります。誠に慶賀すべきことと感謝の気持ちで一杯です。今後とも会員の皆様方が、以前にも増して、ますます積極的に本学会の諸企画に参加して頂きまして、自己研鑽・研修の実を上げられます、と共に、本学会をご支援下さいますようお願いいたします。学会の主役である皆様方と学会とは、まさに共存共栄の関係にあります。会員の皆様方の発展・前進は、本学会の発展・前進でもあります。

本学会がKELESとして発展的再出発後の、ほぼ10年間の諸活動を反省し、学会諸企画の見直し、規定の改変、役員組織の改変、等を行いました。会員の皆様方のご支持によりまして、これらの一連の改変は成功であった、と言えるように思っています。ご協力に感謝いたしております。

何事によらず、主役が表舞台で伸び伸びと活躍するには、必ず背後で、水面下で、懸命に主役を支える裏方が存在しています。その裏方役に徹して下さったのが本学会役員の方々です。顧問、評議員、紀要編集委員、会計監査、の先生方には、大所高所から本学会のために御指導・御鞭撻下さり誠に有難うございました。時には、積極的に研究大会やワークショップの講師として御活躍下さいました。お礼申し上げます。

諸企画の立案から実行、事後処理に至るまでの間、いつも扇の要の役割を演じて下さったのが幹事長・事務局長を中心とする幹事会の先生方でした。

一丸となって活躍して下さいました。頻繁に交換されるメール連絡や年間数回の幹事会では、真剣に、しかし和気藹々とした雰囲気の中で、論議し、様々な企画が案出され、実行に移されました。生みの苦しみ、と共に、楽しさをも共感できるひと時でもありました。毎回の会議後の四方山話では談論風発で、暫しの和みのひと時を感受できましたことも、裏方としての醍醐味だったと言えるのかも知れません。幹事の先生方、有難うございました。

新会長のもとでの本学会の更なる発展を、会員の皆様方も一丸となって支援しようではありませんか。2年後の全国英語教育学会(JASELE)大阪研究大会の成功のためにも、KELES会員一丸となって頑張ろうではありませんか。水面下での自称広報係りとして不肖も微力を尽くしたく思っております。

会員の皆様方の御発展・御多幸と本学会の更なる前進・発展を祈念しながら擱筆いたします。

瀬川 俊一(京都府立大学名誉教授)

### 新会長挨拶

このたびは歴史と伝統のある関西英語教育学会会長という大役を仰せつかり、身の引き締まる思いでございます。力不足ではございますが、今後2年間、新幹事の先生方とともに全力を尽くしてまいりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

前体制におきましては、「行動する会長」である瀬川先生のリーダーシップのもとで、多くの新規事業が企画運営され、KELESの認知度が関西のみならず全国でもますます高められ、「強い関西」というイメージが定着致しました。

一方、先頃の小学校学習指導要領改訂にともない、今後、小学校高学年で実施される英語活動について「生きる力」をはぐくむためにコミュニケーション力を育てることが国策として打出され、日本の英語教育における“教師力”がますます問われる時代へと突入しました。

これらを受けて、KELESでは、新体制のもと、会員の皆様の一層のご理解とサポートをいただき、さらなる展開をはかってまいりたいと存じます。そのためには、

これまでの実績に加えて次のような展開をはかってまいる所存でございます：

- (1) さらに多くの教育現場の先生方の学会参加
- (2) 第36回全国英語教育学会(大阪2010年)の成功
- (3) 卒修(博)論セミナーにおける院生連携強化
- (4) 大会・地区セミナーへの会員参加数の増加
- (5) 会員への電子サービス強化と郵便経費削減

他に授業力検定の企画実施、研究部会、出版事業、他学会との連携等、様々な企画案がございますが、実行できるものから始めてまいりたく存じますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

誠に簡単ではございますが、会長就任のご挨拶とさせていただきます。

吉田 信介(関西大学)

## 新役員紹介

顧問 瀬川俊一(京都府立大学名誉教授)

会長 吉田信介(関西大学)

副会長 玉井 健(神戸市外国語大学)

事務局長(副会長兼務) 本田勝久(大阪教育大学)

紀要編集委員長(幹事兼務) 横川博一(神戸大学)

幹事(記録) 清水裕子(立命館大学)

幹事(会計) 里井久輝(摂南大学)

幹事(セミナー) 泉恵美子(京都教育大学)

幹事(名簿) 岩井千春(大阪府立大学)

※ 評議員、紀要編集委員、会計監査につきましては後日ご報告致します。

## 前役員退任挨拶

「英語教育へのさらなる貢献を」

前事務局長補佐 嶋林昭治(龍谷大学)

たまたま京都の大学に着任したことが縁で瀬川会長からお声をかけて頂き、幹事を務めることになりましたが、この4年間、ほとんど何一つお役に立てなかったと感じています。2006年度、年次大会を勤務校でお引き受けはしたものの、力量不足で万端整わず、会員の皆様にご迷惑をおかけしたことばかりが記憶に残っています。新会長の下、新幹事の先生方には大変なお仕事をお願いすることになりますが、ここまで発展してきたKELESが、関西の、そして日本の英語教育の向上に貢献できるよう、よろしくお願ひします。最後になりますが、幹事在任中、多くの先生方にお世話になりましたこと、厚くお礼申し上げます。また、今後ともどうかよろしくご指導のほどお願ひ申し上げます。

「わくわくする学会に」

前幹事・前紀要編集委員長  
石川慎一郎(神戸大学)

神戸事務局から数えて4年と3か月、KELES事務局でお世話になりました。任期の前半はHP担当とし

て学会ウェブサイトの構築と運営を行い、後半は紀要編集委員長の仕事をさせていただきました。紀要については、瀬川前会長はじめ、幹事各位と論議を重ねつつ、大会発表との連動制、審査システムの電子化、3人のレビュワーによるスコア評価、フィードバック制度の拡充、刊行日の固定化など、いくつかの工夫を試みました。査読委員、編集委員、そしてなにより会員のみなさまのご協力により、おかげさまで投稿数も次第に増加し、紀要活性化については一定の成果が得られたのではないかと考えています。大会・セミナー・紀要はKELESの3本柱ですが、このすべてが有機的に関連し、これからも、常にわくわくする知的興奮を与えてくれるKELESであり続けてほしいと願っています。最後になりましたが、幹事在任中は多くの先生方に本当にお世話になり、まことにありがとうございました。また、今後ともどうかよろしくご指導のほどお願ひ申し上げます。

「益々の発展を願って」

前幹事・前会計 岡 良和(人間環境大学)

瀬川俊一先生から会計を担当するよう要請され、軽い気持ちでお引き受けしたものの、実際にやってみるとなかなか難しく、私に務まるものかと不安になりましたが、おかげさまで何とか4年間続けることができました。お金の処理をしている間に大雑把な性格が少しは改善されたようです。会計をしていて気になったことは、年会費を納めないまま年度末で自動退会になってしまう方が少なからずいらっしゃるということです。会員にとって魅力ある学会にすることで、このような傾向を防止しようと、幹事会でも努力を重ねられてきましたが、今後さらに、各方面で英語教育にかかわる人が集う学会に発展していくことを願っています。最後になりましたが、お世話になりました先生方に心よりお礼を申し上げます。

「会員と事務局との良い連携を願って」

前幹事 倉本充子(広島国際大学)

この4年間会員担当名簿係ということで大変力不足ではありましたが、会長、事務局長、役員の皆さま方のお力添えのもとなんとか役割を務めさせていただきました。2005年には個人情報保護法が完全執行され、会員名簿情報の収集管理の変更を行うなど、会員の皆様のご協力を頂きましたこと、この紙面を持って再度御礼申し上げます。少し残念なことに、事務局は専任の事務員が行っていると思っておられる会員もおられるようでした。会員相互が協力し合って事務局を作り上げておりますので、この点をご理解いただき、ますます英語教育分野での社会貢献ができる団体として発展していくことを祈念いたします。

## 第12回関西英語教育学会研究大会発表報告

2008年5月24日(土) 神戸大学国際文化学部K棟

### 【第1室】

行為の開始を含意する表現の使い分け

田中泰明(神戸大学大学院生)

本研究は、begin to do、begin doing、start to do、start doingの違いをBNCコーパスの分析により明瞭にしようとするものである。「使用頻度」、「共起動詞」という観点から分析した結果、書き言葉ではbegin to do、話し言葉ではstart doingの使用頻度が高く、またstart to do、begin to do、start doingは同じ高頻度の動詞と共起する傾向にあるが共起する動詞のタイプが表現により異なる傾向が見られた。使用頻度と共起動詞という観点から各動詞が特徴付けられることが示唆され、これらの観点を指導に応用する必要性が議論された。

報告者:氏木道人 (関西外国語大学)

「序数+完了形」構文における明示的・暗示的文法指導の比較研究

仲川浩世(関西外国語大学短期大学)

本研究では、日本人学習者にとって複雑な構文と考えられる「序数の完了形」の学習に関して、明示的、暗示的な文法指導の効果の違いが検証された。VanPattenのFocus on Form(形式と意味の関連の学習)に基づき指導法がデザインされ、1)文法項目について直接説明を行う明示的指導と2)説明はしないが形式に意識が向くように教材提示する暗示的指導の効果が比較された。結果、事後テスト1では指導2)のスコアが1)より高く、学習項目が保持されたかを調べるのが意図された事後テスト2では、明示的な指導が暗示的指導に比べて効果を示すと報告された。暗示的指導でも効果が得られる点が議論された。

報告者:氏木道人 (関西外国語大学)

日本語をL1とする英語学習者の英語能力と英語冠詞使用との関係について

田中順子(神戸大学)

本研究では、日本人学習者の冠詞に関する知識の正確さと習熟度の関係が調査された。TOEFL560点を基準に分けられた上位群と下位群に対してスピーキング、ライティングタスクが課され、産出された英文に含まれる冠詞の用法が難易度別に8種類に分けられ、各種類の冠詞を使用する知識が正確なものかどうかの評価された。結果、上位群は、全体的にいずれのタスクでも冠詞使用の正答率が高く、また比較的理解が簡単とされる種類の冠詞において、ライティングという冠詞が正確かどうか判断に時間が取れるタスクでさえ、上位群の正答率が有意に高かった。日本

人学習者の冠詞習得の可能性について活発な議論が行われ、今後の研究が大いに期待される。

報告者:氏木道人 (関西外国語大学)

文学教育と英語教育の融合をめざして

菅田浩一(四国学院大学)

丸山圭三郎の「言葉は、それが話されている社会にのみ共通な、経験の固有の概念化・構造化」という言説に共鳴する発表者は、職場で日々、文学教育と英語教育の融合をめざした授業を実践しておられ、このたびその一端を披露なさった。「英語文学入門」という専門科目において多角的にラフカディオ・ハーンの短編小説と取り組む発表者は、例えば作品“Yuki-Onna”を、17世紀後半英国でグランドツアーの流行によって独自の展開をみせた自然の概念“sublime”と関連づける。そしてさらにはケルト神話や日本の古事記等にも言及する。奥行きのある非常に濃密な実践報告であった。

報告者:宇佐見太市 (関西大学)

絵本を通して異文化理解をはかるために

外山由美子(宝塚市立光が丘中学校)

せめて異文化理解への第一歩となれば、という非常におくゆかしい気持ちで授業を進めておられる発表者の姿に感じ入った。発表者も述べているように、「絵本」には少なくとも三つの利点がある。視覚によって生徒の関心を惹きつけられること、詩の如く凝縮されたコンパクトさが魅力であること、そして紙芝居のように朗読に適していることであるが、絵本といえばまさにイギリスが本場であるので、これからも発表者の中学校での授業にますます磨きがかかることを期待したい。

報告者:宇佐見太市 (関西大学)

高校生に対する多読指導に関する質問紙の分析

今村一博(大阪府立吹田東高校)

多読指導に際して実際に役に立つ研究が不足しているという認識の下、平均的な英語力の高校2年生を対象に8ヶ月半のあいだ図書館に設置されたgraded readersを自由に選んで読ませ、その後の生徒のリフレクションを目的とした質問紙の分析から、発表者は、多読に対する生徒の認識を多面的に考察した。「多読群」と「少読群」とに分け、両者の有意差を見ていくのだが、フロアからも意見が出たように、それらの分析結果をさらに深く掘り下げていけば、より一層堅固で実証的な研究になるであろうことは間違いない。

報告者:宇佐見太市 (関西大学)

## 【第2室】

日本人英語学習者のスピーキング能力育成:TTSを用いた自律的学習

片岡晴美(関西大学大学院生)

TTSを教育現場に生かすため、精力的にフリーソフトを組み合わせて作成されたCD教材による実証研究である。高校生4名を対象者とし、独自教材による音読自主学習課題を課され、事前事後の読みのDurationやPitchの変化率を測定され、英語能力と多重知能について言及された。さらに意識調査も加え、学習者の意識の高まりに貢献があったと結論づけられた。本研究を土台に今後の継続的研究への意欲を示されるものであった。

報告者:倉本充子(広島国際大学)

“音読筆写”ってどうするの？生徒はどう変わるの？  
—高校現場からの発信—

武田 浄(滋賀県立石山高等学校)

井上 亮(関西大学大学院)

高橋昌由(大阪府立山田高等学校)

授業・家庭学習・テスト間の実践をどのようにつなげばより大きな効果を得られるかについて、アクションリサーチの手法で分析され、英文のリズムをたたき込むことの重要性を指摘された。実際の配布シートを含めた独自指導プログラムを「読む」「文法」などの目標ごとに詳細に示された。音読筆写に関わる理論に基づき、さらに現場の学習者の反応を詳細に観察された上でのダイナミックな「現場からの発信」は、フロアとの活発な意見交換へと発展した。

報告者:倉本充子(広島国際大学)

英語プレゼンテーション能力の構成要因

石川慎一郎(神戸大学)

軽やかな英語による発話を皮切りに、身を持って英語プレゼン能力とは何かを示されるというスタイルでの研究発表に一同まずは引き込まれ、その後の研究課題および分析手法の紹介、最後の教育的示唆として「4技能のトレーニングのみではプレゼン能力は伸ばせない。第5の言語機能」であるという流れに十分納得がいったという様子が聴衆から伺えた。TOEIC、TOEIC SW、Versantの測定値の各特徴を捉えての統計分析では、4技能、発話能力、語彙・統語能力との興味ある関係が示された。

報告者:倉本充子(広島国際大学)

学習者の口から英語を！ シャドーイング指導

倉本充子(広島国際大学)

「英語嫌い」が多い教室における動機付けとして、また概念的知識を手續化するための方策として、VOAを素材としたシャドーイングを用いた大学での実践が報告された。さまざまな専門的概念の解説とともに、教室では学生を引きつけるために歌を歌うこと

も辞さない倉本氏の実演の様子が、微笑ましかった(失礼！)。練習した教材での効果を、より一般的なスピーキング場面にどう転化させてゆくかが今後の課題である、という点でフロアとの意見交換も一致をみたようである。

報告者:静 哲人(関西大学)

The effects of a 24-session EFL Pronunciation course reflected in self-reports, human ratings, and acoustic analyses

静 哲人(関西大学)

中学3年生対象、週1回の発音中心の授業を1年間実施する事前と事後の、生徒の自覚的発音能力(継続的質問紙)と実際の発音能力(ある定型表現の録音)が、有意にかつ大きな効果サイズで変化した様子についての分析結果(ホルスティックおよび分析的評定とPraatによる音響分析)が提示され、この結果は主として1対1の継続的実技テストの波及効果であるという主張がなされた。実際の生徒の音声録音も紹介され、フロアも納得していたようである。

報告者:静 哲人(関西大学)

Appropriate assessment for communication classes

Andrew Obermeier(京都教育大学)

大学で少人数の同一グループを複数年に渡って“Communicative English”という名前の授業で担当する際の、主として評価面での工夫が報告された。まずクラスの目的(サブタイトル)を“Speaking”“Sharing Stories”“Research”と細分化し、それに応じた summative assessments と constructive assessments を設定したという。授業の目的に応じて音声録音、ペーパー、ポートフォリオを使い分ける点が、一般に難しいとされるコミュニケーション重視クラスの評価に大いに参考になるものであった。また内容とは別に、聴衆に対して話しかけるスタイルが口頭発表の望ましい形として印象に残った。

報告者:静 哲人(関西大学)

## 【第3室】

学習意欲と評価法の有機的効果

今井祥詠(大阪市立咲くやこの花中学校)

吉田晴世(大阪教育大学)

ARCS動機付けモデルをもとにした、指導と評価の一貫した実践についての報告であった。実践結果については質問紙調査により検証され有意差が認められた(Pre-Post比較)。特に、「英語の学習をがんばろうと思う」という項目で優位であった点は重要であろう。評価によるWashback効果が動機付けの強化という形であらわれたことになる。実際の能力評価をどうリンクさせているかなど、活発な議論が展開された。特に学習者に配付した学習記録シートが生徒にわかりやすく、目標が提示され自己評価できる設計になっ

ている点が優れていると思った。尚、学習記録シート及びこれに関わる研究論文(紀要)は大阪市教育センターHPからダウンロード可能。

[www.ocec.jp/center/index.cfm/1,4696,102,html](http://www.ocec.jp/center/index.cfm/1,4696,102,html)

報告者:若本夏美 (同志社女子大学)

教員の積極的メディア利用は学生の授業評価点を上げるか

東 淳一(流通科学大学)

水本 篤(流通科学大学)

「教員のメディア利用(提示用・学生の活動への利用)に関する調査結果」が提示され(e.g., パソコンを利用しているか、授業でEmailで課題を提出させている、HomePageを利用させているなど)、メディア利用合計得点と各質問項目の点双列相関の結果が提示された。また、Raschモデルによる分析の結果も示された。その結果、意外なことに、「メディア利用と授業の満足度、授業内容の理解との相関」は低かった。教員の熱意や場面に応じた使い方が重要であることが示唆された。パソコンを使っているが学生への指導を疎かにしている教員の例も紹介され、活発な議論が展開された。

報告者:若本夏美 (同志社女子大学)

「HW10原則」の英語学習促進の効果に関する研究

高橋昌由(大阪府立山田高等学校)

宿題はSP(School Policy)、CRP(Classroom Policy)、HWP(Homework Policy)の連携のもとに課されなければならないこと、がまず提示された。HPが効果があるのは、生徒・教師が効果があることを認識する、生徒の英語力伸張に寄与する場合、と定義できる。生徒教師に対する質問紙による調査研究の結果、HW10原則を生徒が効果があり(1年間のどのステージにおいても統計的に有意)、教師に関しても効果があると認識していた。定期テストの結果においてはHW10原則に基づく生徒の方が点数がよかった(統計的に有意)。その後、HW10原則について活発な議論があった。

報告者:若本夏美 (同志社女子大学)

多様化した学習歴を持つ学生への取り組み

小野澤隆(浜松大学)

大学全入時代に入り、大学を取り巻く環境が厳しい中、基礎学力が一定水準に達していない学生を含め、様々な英語のレベルの学習者に対応する為に、浜松大学が行った英語教育改革についての実践報告であった。英語科目を大きく二つに分け、基礎科目では英語の基礎学力の育成をめざし、発展科目ではプロジェクトゼミと題した学生の興味に応じた特色ある授業が展開されている。その他、教育運営にも工夫をして、学習者の英語能力向上を目指している。

報告者:岩井千春 (大阪府立大学)

Learner identity as a two-sided-coin

袁園(神戸大学大学院生)

第二言語を学習する過程で、学習者アイデンティティがどのように構築、あるいは、再構築されるかに関する研究である。研究の理論的な背景についての説明の後、データの収集に関する綿密な計画と方法について説明がなされた。データは、第二言語として日本語を学習している被験者の協力により得られたインタビューデータであった。発表の後には、そのデータの解釈における様々な可能性についてフロアと共に活発な議論が展開された。

報告者:岩井千春 (大阪府立大学)

グローバル人材に求められる英語とは—ESP理論を基にしたニーズ分析結果—

宮田優子(立命館大学大学院生)

日本企業の事業展開が国際化するにつれ、より効果的な英語教育が求められている。そういった背景をふまえ、全国の会社員を対象にしたアンケートを行い、英語による業務行動の頻度を調査することによって、英語のニーズを分析する試みである。事務職or技術職、海外赴任経験の有無、TOEICスコアによって、英語による業務行動の頻度にどのような差があるかを分析した。更に、この分析結果に基づいた頻度表を用いることにより、効果的な語学研修カリキュラムに活かすことが可能であると主張された。

報告者:岩井千春 (大阪府立大学)

#### 【第4室】

句動詞を理解することに最も関連性が強い語彙力は、受容語彙、発表語彙、語の知識の深さのうちどれか

森永弘司(立命館大学)

句動詞を理解するのにもっとも相関が強いのは、受容語彙、発表語彙、語の知識の深さのどの語彙力かについて調べた研究の結果が報告された。各語彙力を測定するテストを実施し、その得点間の相関をみるという方法で調査された。結果としては、発表者の予想に反し、句動詞との相関が強いのは発表語彙であると報告された。質疑応答では、発表語彙を測定したテストの質問方法が結果に影響を与えたのではないかなどの質問が出され、活発な議論が展開された。

報告者:池田真生子 (姫路獨協大学)

『コウビルド英英辞典(改訂第5版)』検索システム:名詞の場合

秦 正哲(兵庫医療大学)

本発表では、コウビルド英英辞典(改訂第5版)における検索システムが、名詞の場合に限定して提案された。学習者が辞典を引き始めるに至る経緯から、文脈に適した意味を検索し終えるまでの過程に沿っ

て大変詳しいシステムが提案された。そして、辞書編纂者や指導者に対して、こうした検索方法の指導をより具体的に学習者へ実施していくことの必要性が主張された。質疑応答では、特定の辞典に限定しない検索システムや、CD-ROMを活用して検索イメージを提示する指導方法の開発などの可能性についても質問が出され、有意義な議論がなされた。

報告者:池田真生子 (姫路獨協大学)

ストーリーテリングの指導における実証的研究—小学生のインプリシット学習と意味処理プロセス—

山本玲子(京都教育大学附属京都中学校)

ストーリーテリングによる「母語を介さない内容把握」と「語彙の長期記憶」への効果を小・中学生を対象に実証研究を行った。内容把握では、小・中学生とも日本語による説明とストーリーテリングによる理解度に差はなく、ストーリーテリングの3つの構成要素(意識的学び、無意識的学び、想像力の伸長)の伸びによる「全体的意味把握」の可能性が示された。一方、長期記憶については、小学生では優位差が見られ、中学生では見られなかった。この点に関して、「言葉に感覚を入れる学びの素地を作るという意味で、早期英語教育での有効性を示唆する」との意見がフロアから示された。

報告者:嶋林昭治 (龍谷大学)

意味拡張と学習英和辞典の語義記述 —「透ける」を意味するrevealing に焦点をあてて

土屋知洋(関西学院大学大学院研究員)

形容詞revealingに「透けて見える」という語義が存在するのかを検証し、加えて、類語see-throughとの比較を通して、revealing本来の語義を探った。『ジーニアス英和辞典』が定義する「透けて見える」という解釈が文脈上の意味拡張により解釈可能な用例が実在すること、限定／叙述用法での頻度・容認度に差がみられること、そしてsee-throughが「透明感」に焦点がある一方、revealingは「露出度」が基本語義であることが示された。この検証結果に基づき、発表者自身が考えるrevealingの語義記述の一例も示された。

報告者:嶋林昭治 (龍谷大学)

多重知能理論(MI理論)とコア理論を活用した語彙指導—前置詞編

鈴木理恵(京都外国語大学大学院生)

「多重知能理論」と「コア理論」を用いることによる語彙学習効果を前置詞の指導を通して検証した。高校生を対象とした実験の結果、日本語訳による前置詞の学習とコア理論に基づいた視覚教材を利用した学習の効果に有意差が見られなかった。フロアからは、イメージのみを使用した実験の問題点や前置詞だけでなくより広範に取り組みをするべきではとの指摘がなされた。発表者からは「繰り返し」の重要性が

今後の課題として報告された。

報告者:嶋林昭治 (龍谷大学)

## 【第5室】

児童絵本理解プロセスの認知的解明を求めて

濱本秀樹(近畿大学)

絵本を使ったストーリーテリングなどの活動は、早期英語教育では一般的によく用いられる方法論の一つである。濱本氏は、外国語の語彙や文法知識が十分でない状態で行われる絵本の理解は、ボトムアップ式ではなく、主としてトップダウン式の処理によって行われていると考え、その認知プロセスをCroft(2007)の「経験の言語化理論」やAliseda(2006)の「仮説形成推論」の知見を取り込んで説明を試みられた。一般に言われる「予測能力」といった漠然とした概念を、形式的に説明する試みは大変興味深い。今後は、母語と外国語といった言語獲得の観点や児童の興味・理解度との関係を実証的に探ることによって、ご研究のさらなる発展を期待したい。

報告者:横川博一 (神戸大学)

つくる・つたえる・学びあう—公立小学校高学年活動報告—

東野厚子(神戸市立外国語大学大学院生)

英語特区に指定された寝屋川市の小学校では、平成17年度から「国際コミュニケーション科」を設置し、大変意欲的な取り組みが展開されている。東野氏は、とりわけ小学校高学年のコミュニケーション活動に焦点をあて、詳細な実践報告をされた。単なる実践の記録ではなく、たとえば、「自分のことを見てほしい」と思う低学年の特性を生かしてどのような活動を行うのかが考えられている点や、「作った作品を持って、ペアで活動する」ことは5年生ではむずかしいが、6年生になるとできるようになる、など、大変興味深い実践経験が数多くあった。小学校英語では、「担任だからできること」があるとよく言われるが、それを担任教師が真に実践するためにはこうした地道な実践の努力が不可欠であると感じるご発表であった。

報告者:横川博一 (神戸大学)

アメリカにおける8つの知能を行かした言語学習の理論と実践—日本の小学校英語教育での4技能統合を目指して

二五義博(広島女学院大学大学院生)

Gardner(1983,1999)の多重知能理論を英語教育に応用しようという意欲的な試みであった。小学校英語では、歌や踊りなどお遊びを中心とする活動に陥りがちであること、画一的で個性が軽視される傾向があること、「聞く、話す」ことに偏りがちで、バランスのとれた英語習得につながらない可能性があることが研究の出発点である。二五氏は、4技能を統合的に指導することの必要性を強く主張され、さまざまな英語活

動と知能との関連について詳細に考察された。一方、質疑応答では、「4技能をバランスよく指導することが望ましいとは思いますが、そこまで十分な時間をとることは困難である」などの意見も出され、活発な議論が行われた。多重知能理論統合的指導を可能にするための枠組みとしてどの程度有効であるのかを明らかにし、現実のさまざまな課題にどう応えていくのか、さらなるご研究を期待したい。

報告者:横川博一 (神戸大学)

神戸大学附属学校再編に関わる中等教育学校英語科カリキュラム開発に関する研究—ICTを活用した教材作りと授業実践を通して—

高木浩志(神戸大学発達科学部附属住吉中学校)

小中高の一貫した英語カリキュラムを望む声が高まりつつある。その中、小学校の取り組みを見据えて作成した新しいカリキュラムやシラバス、またそれに基づいた授業実践が紹介され、その実効性が検証された。具体的には、多くのパフォーマンス課題、ルーブリックを利用した評価活動、教材開発の工夫などが、Plan→Do→Check→Action (PDCA) のサイクルの中で運営されていることが報告された。

報告者:藪内 智 (京都精華大学)

小学校学習指導要領における外国語活動の批判的考察

奥野 久(東大阪市立立新高等学校)

文部科学省から2008年3月に改訂版の小学校学習指導要領が告示され、小学校として初めて第5・第6学年において「外国語活動」が実施されることになった。この発表では、小学校英語教育が必修化されるに至った戦後の歴史的経緯が説明され、文部科学省が公表した「平成19年度小学校英語活動実施状況調査」の集計結果を踏まえて、新学習指導要領に示された「外国語活動」の問題点が批判的に考察された。

報告者:藪内 智 (京都精華大学)

実践的コミュニケーション能力を育成するために必要な語彙選定とカリキュラム開発

丸山華(神戸大学発達科学部附属住吉小学校)

発表者が小学校で過去3年間実践してきた英語学習指導経験を基にして、実践的コミュニケーション能力育成のためのカリキュラム開発について報告された。具体的には、小学校への英語学習導入にあたって、「コミュニケーション能力の素地」と指導要領が謳う項目がより具体的に提示され、コーパス調査などを元にして各学習単元で使用する語彙について児童の発達段階に応じた工夫ある配列の試みが紹介された。

報告者:藪内 智 (京都精華大学)

## 【第6室】

How does "understanding" give an influence on the growth of the teacher and the learners?

森下知美(神戸市立太山寺中学校)

ジャーナルによる授業の内省により、授業が教師中心から学生中心に変わっていくダイナミックな過程を豊富な実例とともに報告した。「理解」「協同学習」「ファシリテーターとしての教師」など、「なぜ、教えるか」という問題を中心に据えた、誰でもが考えなければいけないが、なかなかそこまで手が回らない領域を丁寧にすくい上げた発表であった。

報告者:加藤雅之 (神戸大学)

英語ライティングにおける自己評価と学習に対する意識との関連性—日本人大学生の事例について—

宮崎真由子(京都大学大学院生)

英語ライティングにおける自己評価と動機付けの向上との関連を中心に、意識の変化がいかにパフォーマンスと関連するか(あるいはしないか)について報告した。アンケート分析には「期待×価値理論」を援用し、客観的指標を取り込んでいる点に新しさが見られた。今後行われる調査に期待したい。

報告者:加藤雅之 (神戸大学)

## 【第7室】(ワークショップ 1)

より効果的な教室での音声指導を目指して

中井英民(天理大学)

本ワークショップは3部構成(の予定)だった。第1部では先生とSowter先生が2月に「KELES奈良地区セミナー」で共同発表された内容をもとに、発音教育における問題点が提起された。第2部はその問題点(主にEILをどう捉えるか、発音記号は教えるべきかの2点)に関する参加者の意見交換の場となった。EILに関しては、無視できない観点だが今目の前にいる生徒の指導にどのように反映させるかというまだまだ具体性が伴わず、今後益々議論の必要があると感じた。発音指導に関しては、疑問を感じながらも学校側の方針や与えられた教材に従わざるを得ない現実が生々しく(?)報告された。発音記号に関しては、指導するとしても辞書や教科書によって表記が色々あり、どれを指導すべきなのか確信が持てないといった悩みも出た。ジーニアス英和辞典の話が出ると会場の後ろから、「その発音記号を付けた本人です」と、有本純先生が発言されるという楽しい一幕もあった。メインとなるべき第3部のワークショップは時間切れとなり、昼食時間に希望者のみ体験させていただいた。発音指導に関して英語教師は非常に及び腰である、とのデータを示されていたが、日本の英語教育の中で、教師は生徒がどのような発音を獲得できるように導くのが一番望ましいのであろうかという根本的な問題について考える有意義な場となった。

報告者:佐藤浩子 (関西大学大学院)

## 【第7室】(ワークショップ 2)

プレゼンテーションのデリバリー演習: 実際に「できる」ようにするために

齋藤安以子(摂南大学)

プレゼンテーションのさまざまな教授法は多くの場合、話し手側の心構えや原稿の構成、発表技術を中心に扱う。しかしクラスでデリバリーを学ぶなら、「高度な原稿と完璧な発表」を追求するより「聴衆とのラポールづくりと言語負荷の小さな範囲での意識的デリバリー」を追求する方が、早くから効果が現れる。全力で注意を傾けて話を聴き、目に見える形で話者にフィードバックする「話しやすい相手」を育てると、学習者が過度に緊張せずに発表できる肯定的な環境も同時にできていく。ワークショップでは、聞き手の姿勢や視線、話し手との間から関係のないジャンクを物理

的にとりのけて集中して聞く方法や、プレゼンターとのアイコンタクトに聞き手がシグナルで返答する方法などを紹介した。また、英作文や読解と比べて単純で短い原稿や定型のフレームワークを与えることで言語面の負荷が小さくなり、学習者にデリバリーに意識を向ける余裕ができる。ごく限られた部分だけを学習者のオリジナルの語句にしても、ジェスチャーやビジュアルを加えると、驚くほどバリエーションが広がる。ワークショップ参加者は中学・高校・大学の教員であった。クラスでどのようなタイプの生徒が発表で物怖じしないか、プレゼンの評価基準がネイティブ教員と日本人教員とで異なるのではないか、プレゼンの上手な学生の就職先は、「優れた聞き手」であることも個人の長所ではないか、といった話題もでた。

報告者: 齋藤安以子 (摂南大学)

## 2008年度総会報告 (2008年5月24日)

### 1. 2007年度活動報告

#### (1) 研究大会

##### ◆関西英語教育学会 第11回研究大会

- ・ 期日: 2007年 5月26日(土)、27日(日)
- ・ 会場: 摂南大学
- ・ 講演: 「歴代首相の言語力: 小泉スタイルと安倍スタイル」
- ・ 講師: 東 照二先生(立命館大学)

##### ◆全国英語教育学会第33回大分研究大会

- ・ 期日: 2007年8月4日(土)、5日(日)
- ・ 会場: 大分大学且野原キャンパス

#### (2) セミナー・共催行事

##### ◆KELES第6回セミナー(大阪地区)

- ・ 期日: 2007年7月7日(土)
- ・ 会場: 関西大学千里山キャンパス
- ・ テーマ: 「英語教師のための統計学入門」
- ・ 講師: 水本 篤先生(流通科学大学)

##### ◆KELES第7回セミナー(神戸地区)

- ・ 期日: 2007年10月20日(土)
- ・ 会場: 三宮研修センター
- ・ テーマ: 小学校英語から考える活気ある英語教育
- ・ 講師: 横田玲子先生(神戸市外国語大学)

##### ◆KELES第8回セミナー(京都地区)

- ・ 期日: 2007年12月16日(日)
- ・ 会場: 京都外国語大学(1号館131CALL教室)
- ・ テーマ: 「明日からの授業に役立つインターネットサイト活用術」
- ・ 講師: 石川保茂先生(京都外国語大学)

##### ◆KELES第9回セミナー(奈良地区)

- ・ 期日: 2008年2月3日(日)
- ・ 会場: 天理大学

- ・ テーマ: Speaking Smoothly: the making of smooth talkers (発音、音読、発話の指導を中心として)

- ・ 講演「シャドーイングと言語習得の接点」
- ・ 講師: 玉井 健先生(神戸市外国語大学)

##### ◆KELES第10回セミナー(和歌山地区)

- ・ 期日: 2008年3月15日(土)
- ・ 会場: 和歌山市民会館
- ・ 講演: 日英比較から出発する英語教育の重要性
- ・ 講師: 奥田隆一先生 (和歌山大学)

##### ◆第11回卒論・修論研究発表セミナー

- ・ 期日: 2008年2月16日(土)
- ・ 会場: 流通科学大学
- ・ スペシャルトーク
- ・ 英語教育学の理論と実践の統合を目指して: 「英文が読めたつもり」を見つめた25年間を振り返って
- ・ 講師: 卯城祐司先生(筑波大学)

#### (3) 発行、広報

##### ◆Newsletter 第1号 6月15日

- ・ 第11回研究大会報告、他

##### ◆Newsletter 第2号 9月25日

- ・ 第33回全国英語教育学会大分研究大会報告、第6回セミナー報告他

##### ◆Newsletter 第3号 12月20日

- ・ 第7・8回セミナー報告、他

##### ◆Newsletter 2008年度 第1号 4月26日

- ・ 第11回卒論修論研究発表セミナー報告、第9・10回セミナー報告

##### ◆関西英語教育学会紀要「英語教育研究」No.31

- ・ 発行: 3月21日

##### ◆第11回卒論修論研究発表セミナー発表論文集

- ・ 発行: 2月16日



- (4) 会議
- ・ 第1回定例幹事会 5月5日 龍谷大学
  - ・ 第2回定例幹事会 9月16日 龍谷大学
  - ・ 第3回定例幹事会 3月18日 龍谷大学

※ 随時メール会議を実施

## 2. 2008年度活動計画

### (1) 研究大会

関西英語教育学会 第12回研究大会

- ・ 期日:2008年5月24日(土)
- ・ 会場:神戸大学  
全国英語教育学会第34回東京研究大会
- ・ 期日:2008年8月9日(土)、10日(日)
- ・ 会場:昭和女子大学

### (2) セミナー・共催行事

- ・ 大阪, 兵庫, 京都・滋賀, 奈良, 和歌山地区  
セミナー
- ・ 第12回卒論・修論研究発表セミナー

### (3) 発行、広報

Newsletter: 年間5~6回発行予定

- ・ 紀要『英語教育研究』(SELT) No.32発行予定
- ・ 『第12回卒論・修論研究発表セミナー発表論  
文集』

### (4) 会議

年間、5回程度開催予定

## 第34回全国英語教育学会 東京研究大会

- ・ 会場:昭和女子大学
  - ・ 期日:2008年8月9日(土)、10日(日)
- <KELES担当企画(課題研究フォーラム)>
- ・ テーマ:「多読を科学する(1):第二言語としての英語の学習における効用」
  - ・ コーディネータ(企画・運営):門田修平(関西学院大学)

## 第35回全国英語教育学会 鳥取研究大会

- ・ 会場:鳥取大学 湖山キャンパス
- ・ 期日:2009年8月8日(土)、9日(日)
- ・ KELES担当企画:課題研究フォーラム(2年  
目)

## 年会費

1. 一般会員(関西のみ) 5,000円
2. 一般会員(関西+全国) 7,000円
3. 学生会員(関西のみ) 3,000円
4. 学生会員(関西+全国) 5,000円

## 事務局便り

### (1) 瀬川俊一先生のKELES活動報告

「特別寄稿 関西英語教育学会 (KELES) 活動報告」『STEP英語情報』(STEP日本英語検定協会刊、2008年7・8月号[通巻75号])、21頁

### (2) 紀要DVD販売のお知らせ

待望の紀要DVDが刊行!

英語教育研究の全貌をPC画面に!

会員特別価格 3,000円

『英語教育研究』過去28年分、『卒論・修論研究発表セミナー発表論文集』過去9年分(いずれも2005年度刊行分まで)を全て電子化。鮮明な画像で論文を通読できるほか、OCRによるテキスト情報を埋め込みましたので、論文内の単語などでの検索も可能になりました。

## KELES 第11回セミナー(大阪地区)のご案内

◆ 日時: 2008年7月28日(月)13:00~16:30

◆ 場所: 大阪教育大学 天王寺キャンパス(中央館)315講義室

※詳細は同封の案内をご覧ください。

最新情報が学会HPにて随時更新されますので、  
頻繁に閲覧いただきますようお願いいたします。

<http://keles.hp.infoseek.co.jp/>